

平成 26 年度 第 2 回 槻の木高等学校 学校協議会 記録

本年度第 2 回学校協議会は、本年度第 2 回オープンスクールに日程を合わせ、当日行われた学校説明会(生徒によるクラブ紹介)の協議員による視察を行った後に実施した。

<開催日時>平成 26 年 10 月 25 日(土) 14:30~16:30

<開催場所>槻の木高校応接室

<出席者>

[委員] 澤田 裕 会長、柿原勝彦 委員、北山茂治 委員、芝井敬司 委員

[学校] 平野裕一 校長、奥谷彰男 教頭、小梶芳忠 事務長

山本 尚 首席・奥本雅俊 学習指導室長・若林伸治

<学校説明会を視察して(意見交換)>

芝井委員

大変良かった。学校の方針など、首席が行った説明は真意が伝わるものであった。特に保護者はよくわかったのではないか。子供の中には厳しく感じる生徒もいたかもしれないが…。

平野校長

本校は「自由で楽しい学校」とは真逆の説明をしてきている。誤解されないよう真意をうまく伝える工夫は必要だと思っている。

芝井委員

生徒によるクラブ紹介(クラブ員全員が中学生・保護者の前に並び、各クラブのキャプテン・部長が一言ずつ中学生にメッセージを述べる形態をとっている。)で生徒の良い部分を示す一方で、教員の説明はやや辛口であるという役割分担がなされていると思う。

柿原委員

クラブ説明でキャプテンや部長が、先生方に言わされているのではなく、自分の言葉で中学生にメッセージを投げかけている点がよかった。

事務局(教頭)

始めたころは、皆同じことを言っていたが、指導した結果このような状況になっている。

芝井委員

メッセージの主たる内容はどのクラブもほぼ同じだが、言葉遣いがそれぞれ異なる点や中には「皆さんは、これから受験で大変でしょうが、精一杯頑張ってください。」といった中学生の立場に立った発言をする者もいて、印象に残った。皆、はきはきしていてノーマスであった。フラフラしているような部員が一人もいなかった点も素晴らしい。

柿原委員

最初のクラブが発表しているときでも、最後の方のクラブ員までびしっとした姿勢であった。油断していなかった。ノンペーパーで皆、話している点も素晴らしい。

平野校長

この日のためにしたというより、いつもの姿を見ていただいた。普段の集会でも時間が来れば静かに開始できている。自分たちできっちりできるという自信が生徒にあるのかもしれない。

澤田会長

槻の木教育は、勉強だけではなく、社会に出るための基本的なことを教えているとのことだが、クラブ紹介での生徒の状況がまさにその成果。私の子どもが本校を受験したのも、このオープンスクールに参加したから。槻の木生のあの姿に、中学生は憧れる。きっちりとやっている子とそうでない子が混在すると、全体の士気は下がるが、槻の木生はみんながやる。自然と真面目にやるのが身に着く。

芝井委員

真面目を冷やかされたりすると、真面目にしようとしてもできなくなる。高校生は周りの状況に敏感であり、ひとつ間違えると、みんなで低きに流れてしまう。槻の木ではそういうことが見られない。

平野校長

年に何回か定期考査期間前に、クラブ員全員を集めて部員集会という集会を実施し習慣化している。部長やキャプテンだけを集める会議はどの学校も行っているが、本校では全員を集めることにより、多数の整然とした姿を見て、生徒はだらしなくできなくなる。

行事の準備もクラブごとで分担。自分のクラブの為にだけではなく、全体への貢献の精神も養われているのではないかと。

芝井委員

大学でもサッカー部員にボランティアで清掃を行う取り組みをしている。普段は試合のことしか考えないが、ボランティアについて考えるよいきっかけとなっている。

北山委員

中学生にとってクラブ活動の存在は大きい。課題のある生徒も、クラブをすることにより、毎日の生活が良い方向に変化することが多い。入部率を高めたいと思っている。上級生がしっかりしていると、教員以上に良い指導効果がある。

事務局（学校説明会担当者）

1 回のリハーサルで今日を迎えている。担当者としても、生徒が予想以上に頑張ったと感じている。前回ミスをした生徒が、今回それを乗り越え奮闘している姿は、他の生徒にとってもよい影響を与えている。

<話題提供1 平成28年度以降の高校入試制度の変更（平野校長）>

平成28年度以降の高校入学者選抜については、現在改善方針（案）が示されている。

槻の木高校の高校入試は、これまで一貫して、3月の後期選抜に先立って、2月に前期選抜として実施されてきたが、改善（案）では、他校と同様に原則一本化され、3月実施になる見込み。選抜機会が原則一度きりになり、受験生が槻の木の特色ではなく、成績のみを基準に選択をするのではないかと危惧している。

また、合否ラインの前後のボーダーゾーンは高校が掲げるアドミッションポリシー（学

校が求める生徒像)を基準に合格者を決定することになる。

今後の広報について、委員からのアドバイスをいただきたい。

<提言1 平成28年度以降の高校入試制度の変更を踏まえた広報>

芝井委員

アドミッションポリシーで合格を決定するということは妥当である。塾に対しても「偏差値ではなく、アドミッションポリシーを重視して学校選択を進め送ってほしい。」とのメッセージをはっきりと出すべき。

北山委員

中学校がよく趣旨を理解して進路指導をしなければならない。塾等の指導はアドミッションポリシーを重視したものにはならないと思う。槻の木高校が築いてきた校風を続けられるような生徒を送れるのは中学校の進路指導にかかっている。中学校の指導と塾等の指導は方向性が異なることが多い。

芝井委員

中にはよく趣旨を理解される塾等もあるかと思うので、槻の木高校としてのメッセージを発信し続けるべき。

平野校長

これまで高校入試の説明は中学校に徹底することが中心であったが、塾等にも積極的に理解を求める動きも大切だと思っている。

芝井委員

潤沢に資金があれば、広報に費用をかけることもできようが、そうでない中では、既存のルートを通じて働きかけるしかないだろう。

大学で広報をしたときに、ある大手塾の担当から「本当に受験生に大事な情報が伝わっていると思っているのか？」との指摘を受けたことがあり、回答に窮した。良いことをやっても実効性がなければならない。そういう点から広報の手法を検討されたい。

例えば、今日の学校説明会での槻の木生の振る舞いは、中学生に確かな情報を伝えたはず。保護者や中学校の先生(校長、進路担当者、担任)にどのように伝えればよいのかも検討を。

P T Aの方々の広報での協力は得られないか。P T Aで話し合いをしてアイデアをいただくなどは可能かもしれない。

北山委員

最近は公立高校も様々な特色を打ち出しているので、中学校でも将来何を求めているかにより学校選択を指導するよう改善してきている。

調査書の評定が絶対評価に変更となる。チャレンジテストにより公平性の担保が図られるときが、一方で、塾等がチャレンジテストの点数での1点刻みの進路指導を推進しないかとの心配がある。塾等に対する働きかけも必要。

事務局(広報担当者)

大手の塾と地域にねざした塾とでは状況が異なる。後者については、生徒の確保の為、より一層きめ細やかな指導―すなわち各高校の特色の理解を踏まえた指導―が売りにな

っている。これまでの選抜制度の変更では、多くのデータを基にした進路指導に信頼が集められてきたが、今般の改善方針（案）では、各校の特色をいかに理解しているかがポイントとなるかもしれない。

澤田会長

従来、本校は前期選抜であったことから、受験生にとっては、後期選抜で再度チャレンジする機会が残されており、前期選抜実施校としてのメリットがあったと思う。その一つに、遠方からでも槻の木高校をチャレンジしようという生徒が相当いるが、後期選抜で一本化されると、受験者は安定志向に進み、遠方からの志願者も減り、地元集中が進むのではないかと懸念している。明確なアドミッションポリシーを打ち出して、選ぶ側にしっかりと伝える必要がある。

事務局（広報担当）

中学生が情報を欲しているもっともよい時期に広報しないといけない。そこが難しいところで、中3になってすぐの頃では早過ぎる。中学生に進路意識を高めてもらうことも効果的な広報を行う条件になる。不特定多数にビラを配布するような広報ではいけないと思っている。

柿原委員

相手がどう思ってビラを受け取るかが問題である。興味を持ってもらう仕掛けをどうするか。

芝井委員

興味を持ってもらうということと言うと、中学校の先生方や保護者の存在は大きい。槻の木と他の高校とは異なるというアピール、同じだと考えると当てが外れるかもしれないので、理解した上で受験させてくださいというメッセージが必要。「いい学校だから」ではなく、「他校と異なることをしているので、それに合う人に来てほしい。」といったほうがよいかもしれない。

柿原委員

言い方は悪いが、「誰でもいいですよではなく、学校も生徒を選びますよ。」ということですね。

澤田会長

現在の槻の木生を見てもらうことが最も近道ではないか。本校は、こんな生徒を求めています。こんな生徒に育てます。本校の方から生徒とともに、中学校に出向いていくことも考えてはどうか。

北山委員

中学校の中には、高校から先生や生徒を呼んで、生徒や保護者の前で話をしてもらったり、出前授業をしてもらう機会を設けている学校もある。

中学生の意識の問題であるが、文化祭・体育祭が終わり秋の定期テストが終わる時期にならないと進路についてのエンジンがかからない。塾に行く生徒は夏休み前後で変化がみられることもある。

事務局（広報担当）

槻の木生をお見せする際の特徴として、一部の生徒を見せるのではなく、全員を見せ

ている。それは、最高レベルの高さだけを示すのではなく、平均レベルの高さを示したいからである。その結果、今回のオープンスクールといった実施形態が最も効果的ではないかということになった。

本校の取組みを中学生に体験させる、例えば、1日勉強会に参加するなどの試みも、今後あってもよいかもしい。

芝井委員

変更の時期はチャレンジの時期。いろいろな方法やアイデアを各方面（例えば、PTA）とも協議しながら考えていくべき。いろいろな案を出し、その中から選べばよい。何もせずに時間だけが経つということだけは避けたい。公立高校としてできることとできないこと、やってはいけないこととやるべきことを精査して進められたい。

平野校長

教員だけで考えるのではなく、保護者に聞いて、「こんな風に言えばわかりやすいのに。」といった意見がいただければありがたいと思う。

澤田会長

在校生の保護者の意見を聞いてみてはどうか。

柿原委員

一番身近な方々の意見を大切にすればよい。

平野校長

保護者にとって「うちの子のここを良いところとして認めてほしい」ということが、いわばアドミッションポリシーの裏返しになる。それを教えていただけるならば大変うれしい。

芝井委員

キーワードをお示しして、選んでもらってもよい。

澤田会長

保護者の口コミは結構な広報媒体。

柿原委員

商売でいうと、お客さんがお客さんを紹介することは一番良い方法。

芝井委員

生徒と保護者が広報に貢献してもらえるとよい。新聞広告などはあまり効果がないのが実態。卒業生にも協力してもらえればよい。

事務局（教頭）

卒業生とのネットワークは強めていきたい。

平野校長

この協議会でもご提言をいただいた「同窓生を母校に呼び取り組み」をしている大分県の高校へ首席が視察を予定。

北山委員

卒業生の中から、中学校教員の輩出を期待している。

<話題提供2 English Camp の実施報告（事務局）>

オーストラリアへの語学研修が中止になったことから、英語についての取組みとして、代替案として発案。ネイティブの先生を集めた英会話教室にはしないことをコンセプトとした。関西大学の宿泊施設を使用させていただき、1泊2日で、一部のプログラムを除いて日本語禁止で実施。

ねらいは「英会話のスキルアップ」より、「英語を使って、参加生徒・大学生・教員（英語以外の教員を含む）と仲良くなろう」を優先する形で設定し、英語科教員が主催するのではなく、英語以外の教員も構成員である学校運営室が主管。

関西大学総合情報学部の久保田賢一教授以下、特に大学院生・大学生には直接参加生徒をサポートしていただき、年齢的に近い彼らとは濃厚な人間関係を築くことができた。

また、英語で過ごしたプログラムを振り返って、「どのように英語で表現すればよいのか」を英語科教員に質問するプログラム（ここでは日本語を解禁した。）では、生徒から熱心な質問が相次いだ。

<提言2 English Camp の実施を踏まえた特色ある取組み>

芝井委員

久保田教授は、大学院生を恒常的に海外に連れて行き実践させておられ、ご自身も国際機関での勤務経験もあり、当該プログラムのアドバイザーとしては最適。

事務局（English Camp 担当者）

協力いただいた大学の先生方や学生さんが、英語で榎の木生をうまく褒められ、意欲を高めていただいた。

柿原委員

海外派遣も大切だが、短期間でのこのような取組みも、大学・高校双方にとって有意義であったと思う。素晴らしい企画。規模の拡大も検討されてはどうか。

事務局（英語科教諭）

英語教員の発想では、英語力の向上を主目標としてしまい、逆に目標達成は難しくなっただろう。「仲良くなること」を目標としたため、英語としてのハードルが低くなり、生徒が生き生きと過ごせたと思う。

柿原委員

英語でしか話せない状況に追い込んだうえで、日本語での質問も可としたプログラムを持ってきたところは一つのマジック。私自身、海外で仕事をした際、必要に迫られて勉強した。英語を使う体験をたくさん持つことが英語に対するハードルを下げる。もう少し期間を長くすれば、「日本語で考え英語に訳す」から「英語で考える」ようになると思う。海外に出るためには費用もかかるし安全面でも心配な面があるので、ぜひ継続を。

平野校長

本校は3か国の高校と姉妹提携を結んでいる。当方から行く年度は別にして、お招きする年度は、今回のような企画を行ってもよいと考えている。新しい試みでもあるので、「毎年実施」が先にあるのではなく、長く行うために、大学のご理解を得ながら進めたい。

澤田会長

今回の大学生との交流は、とても有意義だったと思う。今後とも関西大学が協力していただけるといいのだが、無理な場合は、他校の生徒との英語での交流を検討されてはどうか。今回とは異なる刺激があってよいのではないか。

〈全般的な提言〉

芝井委員

今回の入試制度の変更は、槻の木の内情で生じたことではなく、外部事情によるもの。なぜそのために労力をかける必要があるのかとの疑念を持たれる向きもあるかもしれないが、制度の変更時期は落とし穴に注意されたい。それを未然に防ぐためのリスク管理を。変更期にこそチャレンジし、悠々と乗り越えられますことを期待。

柿原委員

オープンスクールの生徒のクラブ紹介での生き生きとし自信を持った表情に感動した。選抜制度の改善に伴う広報にはぜひPTAの力の活用を。English Campはさらに進化させ継続し、新たな槻の木の特色に。

澤田会長

府内の高校が後期選抜に統一されれば、本校がこれまで前期入試だからということで、少し背伸びして受けていたような生徒は減少すると思う。結果的に、本校の受験生の学力水準はこれまでより上がるのではないか。入試制度が変わっても、これまでと同様に、槻の木に入学した生徒は「原石」として、学力のみならず生活規律も含め、輝かせてあげてほしい。

北山委員

中学校にとっても、入試制度の変更がどういう影響を及ぼすか予想がつかねるが、これまで通り、学力面だけでなく、各高校の特色などを踏まえ指導していきたい。槻の木高校には、これまで築き上げてきた方針等を発展させ、中学校としても広報できるようにしていただきたい。

〈宮坂委員からのご意見〉

3年間で次の進路決定、将来のキャリアの土台として何を身に着けるのか、キャリアパスならぬ学びのパスを示す必要がある。

アドミッション入試が話題になるが、大学の場合でいえば、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーと一体であり、高校でもこれらを一体的に考える必要がある。

中学生に「学校」選択をしてほしい高校の側から考えるなら中学生、保護者、中学や塾の進路担当は顧客であり、そこに対する、高校教育の周知 → 理解 → 出願促進（進路選択・決定）、のプロセスにいかにか多くの、しかも高い質の顧客に乗ってもらえるかがポイント。

ントになる。学校づくり「周知」「理解」「出願促進」の各プロセスでどこ・誰（対象）に対し、どんな内容（コンテンツ）をどのようなツール（広報手段も含む）で働きかけるのか、十分な戦略が必要となる。すべての教育活動がPRのツールとなる。

しかしそれだけがPR・生徒募集ではない。このプロセスとは対極となるが、PR・生徒募集は基本的に中学生の進路・生き方の指導（支援）、という立場で行われるべき。客集めのための奇を衒ったり、良いところ取りではない。子どもたちの生き方にどの様にかかわっていくのかが基本である。そのために中学校、できれば地域の子どもにレンジを広げた生徒の育成（目的）、学校づくり（手段）が求められる。

こちら側の商品に魅力がある場合、最大のPRは相手がいかにその商品を理解してくれるか、そのうえで選択・購入してくれるか、ということだが、理解を促進する有力な手立ては、協働の教育活動、研究活動に相手を巻き込むこと。中高連携、高小連携、保護者・地域との連携をこの視点から見直す。一方的な発信ではなく中学の課題からも学ぶ。互恵的にともに歩む、ともに教育を作る姿勢が共感・同感・協調・一体感を生む。

英語に関しては、生徒が主体的に参加できる場の設定（疑似英語圏の空間など）づくりをしてはどうか。

また、単に話せる、聞くことが出来るだけでなく4技能すべてが大切。特にこれからは相手の背景も含めて人間関係を作る、対人理解を進めるという日本人の特性も生かした「深い」理解（文書であれば背景の文脈まで理解する）、同様に中身の深い発信（表現）が問われる。これらは、英語だけでなくクロスカリキュラムとして実施しないと難しい。